

魚介類およびその伝統的料理に対する全国保育園児の嗜好：20年の変遷

著者	峯木 眞知子, 成田 亮子, 戸塚 清子
雑誌名	東京家政大学生生活科学研究所研究報告
巻	36
ページ	37-40
発行年	2013-07
出版者	東京家政大学生生活科学研究所
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00009934/

魚介類およびその伝統的料理に対する全国保育園児の嗜好 —20年の変遷—

峯木真知子*¹ 成田亮子*¹ 戸塚清子*²

Food Preferences for Seafood and Their Traditional Dishes of Children at Japanese Day Nurseries —20 Years of Changes—

Machiko MINEKI, Akiko NARITA, and Kiyoko TOTSUKA

1. 緒 言

幼児にとって、動物性たんぱく質は成長に欠かせないものであり、日本では古くからその摂取源として、魚介類を利用してきた。しかし、魚離れがいわれ、2006年頃から一人あたりの魚介類の摂取量は減少している¹⁾。このことから、食生活における魚介類の摂取の仕方が変化していることが考えられる。魚介類の嗜好および摂取量に関するアンケート調査は1990年代には多く報告されていたが^{2)~4)}、最近の研究では少ない⁵⁾。

著者らは、1990年、1996年、2001年および2006年に、全国各地の保育所に通う幼児を対象に、魚介類およびその料理に対する嗜好についてのアンケート調査を行った^{6)~9)}。その結果、いずれの年でも、幼児(1990年1036人、1996年1418人、2001年1966人、2006年1342人)の70%は魚介類を好み、その好む調理法および魚種には、在住する地域による違いが見られた。2001年より、同じ動物性たんぱく食品である肉類の嗜好を質問項目に追加し、2006年より乳類に対する嗜好も加えた。

本研究では、これらに引き続き、2012年に幼児の魚介類・肉類・乳類に対する嗜好の調査を、全国の保育所に依頼し、幼児の嗜好状況を調べた。その結果より、1991年から2012年までの幼児の嗜好を分析した。対象の幼児は、保育所給食で多種多様な食品を食べ、保護者だけでなく、保育者も食事に立ち会うことより、幼児の正確な好き嫌いの状況が分かる保育園児としている。

これらの結果は、幼児の食生活における魚介類料理の方向性を考える資料とする。それらを解析することにより、食生活の変化をとらえ、魚介類摂取における今後の展望を推測する。

この研究は、本学生活科学研究所より2012~2013年度の温故知新プロジェクト研究として、研究助成をいただいた。

た。データは現在も解析中であり、初年度にあたる今年度は2012年の調査結果を主に報告する。

2. 調査方法

1) 調査対象

全国15地区(札幌、秋田、仙台、宇都宮、東京、横浜、甲府、長野、黒部、和歌山、米子、高知、太宰府、鹿児島、那覇)にある保育所に通所する3歳以上の幼児の保護者に、アンケート用紙を配布し、留置法により回収した(有効数1824部)。今回の調査も、前報の調査^{5)~8)}と同様に、漁港を有する秋田、気仙沼、横浜、黒部、和歌山、米子、高知、鹿児島、那覇を海岸部(1013名55.5%)、魚介類の流通が速いと思われる大都市および周辺の東京、札幌、大宰府を都市部(391名21.4%)、宇都宮、甲府、長野を内陸部(420名23.0%)の3区分に分類して、地域による違いを検討した。

2) 調査項目と調査期間

調査項目は、魚介類・肉類・乳類に対する幼児および両親の嗜好、魚介類・乳類の調理法に対する嗜好、魚種18種および魚介類を用いた伝統的料理に対する嗜好などである。

調査期間は2012年9月~11月である。

アンケートは無記名式で行い、個人情報の遵守に関する注意の説明用紙を添付した。

3) 統計処理

調査の集計には、統計用ソフトSPSSバージョン14.0を用い、有意差検定には、 χ^2 検定およびスピアマン順位相関係数を用いた。

3. 調査結果および考察

1) 調査対象者

調査対象の幼児は、男48.0%、女47.9%でほぼ同数で

*¹ 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

*² 大妻高校 (Otsuma High School)

表1 2012年の調査対象者の属性

	項目	人数	%
年齢	3歳	411	22.5
	4歳	587	32.2
	5歳	645	35.4
	6歳	181	9.9
性	男	876	48.0
	女	873	47.9
	未記入	75	4.1
第何子	第一子	935	51.3
	第二子	608	33.3
	第三子	219	12.0
	第四子以上	46	2.6
	未記入	16	0.8
家族構成	祖父母同居	382	20.9
	核家族	1285	70.4
	父母子	150	8.2
	未記入	7	0.5
合計		1824	100.0

あった。年齢では、5歳35.4%、4歳32.2%が多く、また第一子が51.3%で多かった(表1)。

対象の都市は、札幌(85名)・秋田(146名)・仙台(122名)・宇都宮(135名)・東京(236名)・横浜(111名)・甲府(141名)・長野(144名)・黒部(170名)・和歌山(60名)・米子(65名)・高知(87名)・大宰府(70名)・鹿児島(139名)・那覇(113名)であった。

2) 幼児の魚介類、肉類および乳類に対する嗜好

i) 魚介類に対する嗜好

幼児の魚介類に対する嗜好は、2012年調査では大好き27.6%、好き41.7%、普通26.9%であった(図1)。2006年の調査では、大好き32.2%、好き40.9%であったので、両調査を比較すると大好きな割合は4.6%も低くなっていた($p < 0.05$, 図1)。魚介類が嫌いと答えた幼児は1991年から2012年の調査のいずれも2~3%の低い値で変わらなかった。

ii) 幼児の肉類・乳類に対する嗜好

幼児の肉類に対する嗜好は、2012年調査では大好き34.0%、好き39.5%で、乳類に対する嗜好は大好き39.5%、好き40.0%であり、73~80%の幼児が好んでいた。動物性タンパク質食品に対する幼児の好きな割合では、魚介類が約70%で最も低く、肉類は73.5%で、乳類が約80%で最も高い値を示した(図2)。この結果を2006年の調査結果と比べると、魚介類が3%低下し、肉類は変わらず、乳類では3%高くなっていた。

iii) 年齢別魚・肉・乳類に対する嗜好

魚介類に対する嗜好(2012年調査)を年齢別に見ると、

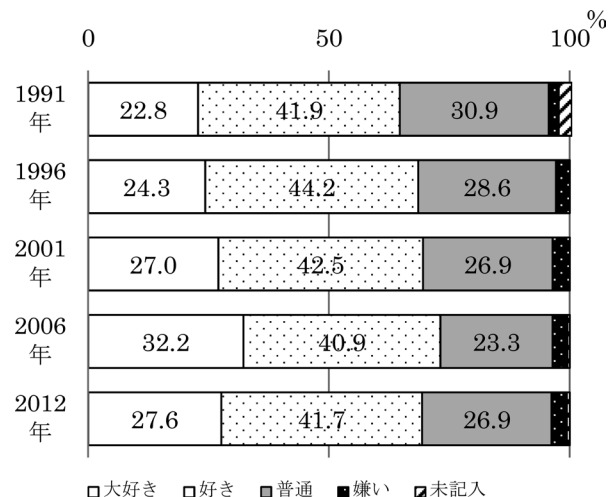


図1 幼児の魚介類に対する嗜好の変遷

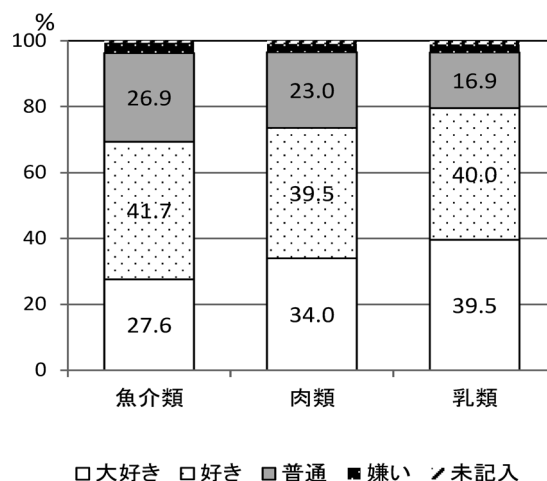


図2 幼児の魚介類・畜肉類・乳類に対する嗜好(2012年調査)

大好きと好きを加えた割合は3歳71.5%、5歳67.6%で、年齢とともに好きな割合は減少した(図3、 $p < 0.05$)

肉類に対する嗜好は、3歳67.2%、5歳77.1%で、年齢とともに増加する傾向を示した($p < 0.05$)。乳類に対する嗜好は、3歳が82.5%でやや高いが、年齢による違いはみられなかった。これらの傾向は、2006年の調査と同様であった。

iv) 地域別幼児の魚介類・肉類に対する嗜好

幼児の魚介類および肉類に対する嗜好を地域別に2001年調査と2012年調査を示した(図4・5)。

魚介類に対する嗜好は、2001年調査では、海岸部の幼児の71.4%が好んで最も高い値を示し、内陸部>都市部と好む割合は低下した。2001年と2012年の調査を比較すると、海岸部の幼児では、好きな割合は2.1%低下し、都市部の幼児では、7.0%増加し、内陸部の幼児の好きな割合は違いがなかった。しかし、魚介類が大好きとした割合は、両年の調査とも内陸部に住む幼児が最も低く、

魚介類およびその伝統的料理に対する全国保育園児の嗜好

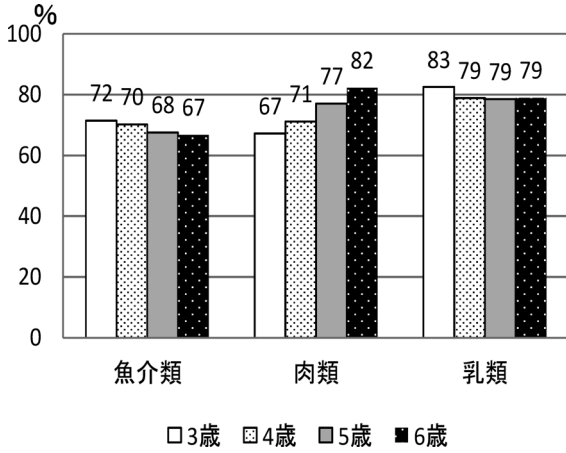


図3 年齢別幼児の魚介類に対する嗜好

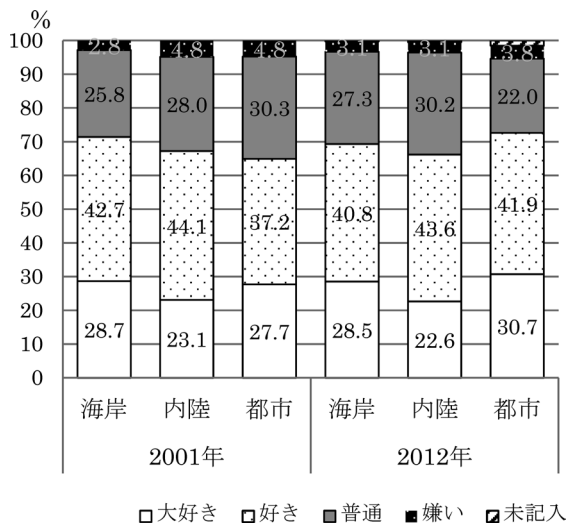


図4 地域別幼児の魚介類に対する嗜好

2012年調査では22.6%で、2001年調査の23.1%より低い値であった。

肉類の嗜好では、2001年調査で都市部の71.7%の幼児が好み、内陸部>海岸部の順に低かった。2001年調査では、魚介類の地域別傾向と肉類の傾向は逆で、海岸部の幼児は魚介類の摂取量が多く、都市部で肉類の摂取量が多かった。2012年調査では、肉類を好きな割合が最も高い地域は海岸部で、幼児の74.6%が好み、都市部73.4%>内陸部71.0%の順であった。2001年と2012年の調査を比較すると、海岸部の幼児では、10.4%も高くなり、都市部でもさらに1.7%高くなった。

全国的に魚介類より肉類の嗜好が上がっており、肉類の摂取量が増加していると考えられる。

v) 都市別幼児の魚介類に対する嗜好

都市別に見ると、2012年の調査では、幼児が大好き・好きと答えた割合が70%以上を示した地区は、黒部(77.1%)、札幌(72.9%)、太宰府(72.9%)、東京(72.5%)、高知

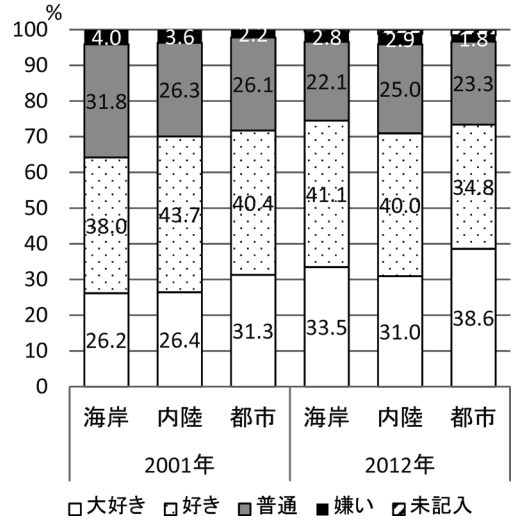


図5 地域別幼児の肉類に対する嗜好

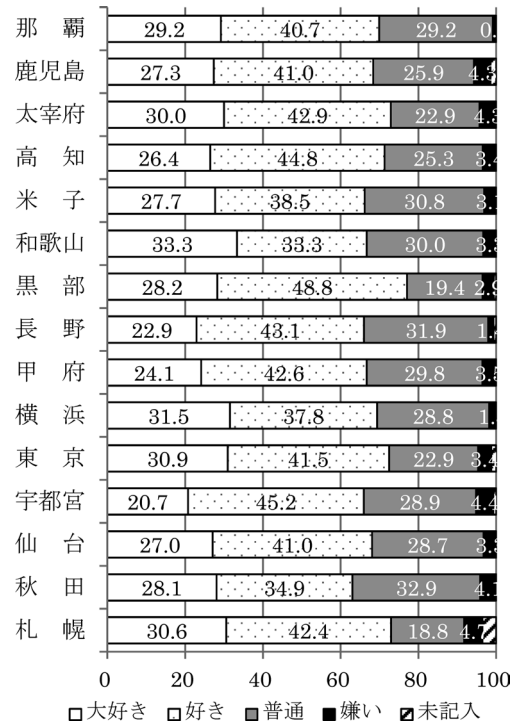


図6 地区別幼児の魚介類に対する嗜好 (2012年調査)

(71.3%)の5市であった。

大好きな割合では、宇都宮市(20.7%)、長野市(22.9%)、甲府市(24.1%)の内陸部にあたる地区が低い値を示した。このことから、魚介類の嗜好は、海岸部および都市部の違いはほとんど見られなくなったが、内陸部に住む幼児では、流通事情による影響が嗜好にも影響していると考えられる。

vi) 母親の魚介類、肉類および乳類に対する嗜好 (2012年調査)

母親の魚介類に対する嗜好は大好き32.8%、好き

42.5%であった。肉類に対する嗜好では、大好き 26.0%、好き 48.8%であり、乳類に対する嗜好では、大好き 32.6%、好き 38.6%であった。

幼児の嗜好には、母親の嗜好が大きく関連する。相関係数をみると、母親のそれぞれの嗜好は、幼児の魚介類に対する嗜好 ($r=0.335, p<0.01$)、肉類に対する嗜好 ($r=0.325, p<0.01$)、乳類に対する嗜好 ($r=0.398, p<0.01$) で他の項目より高かった。

3) 幼児が好む魚介類の調理法

幼児が好む魚介類の調理法 (2012年調査) は、焼く 86.1%、生・刺身 56.7%、煮る 52.0%であった。これらを地域別に見ると、焼く調理法は、最も好まれ、海岸部 85.6%、内陸部 87.6%、都市部 85.7%で地域に関係なく好まれた。生・刺身も 56~58%を示し、地域別による違いは見られなかった。煮魚料理は、都市部 54.0%で好まれ、内陸部 48.8%で低い傾向であった。

油焼き、ソテヒは都市部の幼児の 41.7%に好まれ、内陸部の幼児 30.0%で低く、揚げるは海岸部の幼児 37.3%で好まれる傾向であった。

「煮る」、「生・刺身」を好む割合は、2006年の調査より、6~7%低い値を示した。

4) 幼児が好む魚種 (2012年調査)

幼児が好む魚種は、えび、まぐろ、さけ、あさり、しらす、かに、いか、ししゃも、さんまであった。大好きと答えた幼児が 35%以上を示した魚種は、えび、まぐろ、さけ、あさりの 4種であった。嫌いと答えた割合が 10%以上の魚種は、えび (14.9%)、あさり (13.6%)、かに (11.2%)、いか (18.5%)、ししゃも (12.9%)、うなぎ (12.4%)、かつお (10.7%)、いわし (13.6%) の 8種であった。知らないあるいは食べたことがないと答えた割合が 20%以上であった魚種は、うなぎ (23.4%)、たい (25.1%)、かつお (25.1%)、いわし (24.5%) であった。

さけ、まぐろは、好まれる割合に地域による差がなく、幼児に好まれる魚種であった。また、さけ、まぐろは年々好きな割合は増える、あるいは変わらないが、その他の魚種は好きな割合が低下の傾向であった。

4. ま と め

1) 2012年に全国 15地区、1824名の幼児に魚介類に

対する嗜好のアンケート調査を行った。

2) 幼児の魚介類を好む割合は、1991年より 2006年調査まで増加していたが、2012年調査では、低下傾向を示した。畜肉類、乳類を好む割合には 2006年調査より変化がなかった。魚介類の摂取量が減少していることが考えられる。

3) 魚の調理法は、焼く、生・刺身、煮るが好まれた。生・刺身の好きな割合は 2012年調査で低下し、蒸す調理法が増していた。

4) 幼児の好む魚種は、えび、まぐろ、さけ、あさりなどであるが、2006年調査より好む割合はさけ以外では低下している。

この論文の一部は、第 65 回家政学会 (平成 25 年 5 月、昭和女子大学) で発表を行った。

文 献

- 1) 健康・栄養情報研究会(編) (2009). 『国民健康・栄養の現状—平成 18 年厚生労働省国民健康・栄養調査報告より—』 第一出版, p. 93
- 2) 加賀谷みえ子, 福谷洋子, 木村友子 (1993). 児童の魚嗜好と食生活の関連性, 椋山女学園大学研究論集, **24**(第 1 部), 463-475
- 3) 坂本友子 (1992). 魚料理の嗜好に関する調査—年代別の嗜好と共通性, 九州女子大学紀要, **28**, 55-62
- 4) 星野英子 (1991). 女子学生の魚食嗜好について, 甲南大学家政学部紀要, **27**, 81-91
- 5) 志垣 瞳, 池内ますみ, 小西富美子, 花崎 憲 (2004). 女子大学生の魚介類嗜好と食生活, 日本調理科学会誌, **37**, 206-214
- 6) 峯木真知子 (1993). 魚介類及びその伝承料理に対する幼児の嗜好調査, 青葉学園短期大学紀要, **18**, 47-52
- 7) 戸塚清子, 峯木真知子, 井戸明美 (2001). 魚介類およびその料理に対する全国保育園児の嗜好とそれに影響する要因, 日本調理科学会, **34**, 205-213
- 8) 峯木真知子, 棚橋伸子, 戸塚清子 (2005). 魚介類およびその料理に対する全国保育園児の嗜好 (2001 年), 日本家政学会, **56**, 857-865
- 9) 峯木真知子, 戸塚清子 (2011). 魚介類及びその料理に対する全国保育園児の嗜好 (2006 年), 日本家政学会, **62**, 387-394